

研究代表者 荒野泰典

『グローバリゼーションの歴史的前提に関する学際的研究』

2003年8月

日本における濟州島史についての研究動向（16世紀以前）

高橋公明

1 はじめに

ここでは日本で発表された研究を対象に、濟州島の歴史についての研究動向を概観する。このような試みは、すでに梁聖宗によってなされており、そこでは歴史学・地理学・文化人類学・言語学などの成果を網羅的に検討している（1992年）。本稿では16世紀以前の濟州島の歴史に関する研究のなかでも海域史に関わるものを紹介し、今後の課題と展望について私見を述べる。

なお、1997年12月12日-13日、濟州道庁の主催により第1回濟州史定立学術シンポジウムが開催され、そこで「耽羅国の内的構造と対外関係」と題して報告した。本稿はその報告原稿を基礎とし、新たな研究動向を追加したものである。

2 王権の性格と外交

文献史学の立場から濟州島の歴史を考えると、耽羅という王朝から始めなければならない。ただし周知のように、耽羅はその時代の自身を表現する王朝史をもたない。したがって、耽羅史を構築するためには、まず周辺諸王朝から関連史料を抜き出すことが必須の作業となる。

森公章はその困難な課題に立ち向かった。古代耽羅に関する史料を東アジアのなかから博搜し、耽羅史を時期区分するとともに、7世紀後半を中心に王権の基本的な性格づけを試みたのである（1986年）。Ⅰ期（?～5世紀末または6世紀初）を馬韓、百濟との交易の時期、Ⅱ期（5世紀末または6世紀初～660）を百濟の南下により、その服属国となった時期、Ⅲ期（660～679）百濟の滅亡により独立した時期、Ⅳ期（679～1105）を統一新羅、高麗の服属国となった時期、Ⅴ期（1105～）を高麗の郡県となり、以後、完全に半島国家の領土となった時期というように5期に区分した。この検討により、耽羅史を編年的に概観することが可能になった。

寛敏生は、耽羅王権の構造と森の時期区分でいうⅢ期の耽羅と日本の外交に焦点を合わせて検討した（1989年）。とくに耽羅王、王子、貴族等が百濟の官位である「佐平」を等しく称していることに注目し、「王以下の耽羅支配層における階層秩序が未確立であり、

王と貴族とがいわば『平等』な関係をなしていた」と評価した。すなわち、王は支配層のなかの突出した存在ではなく、王家が世襲を維持していくためには百済による王位の保障が必要であったということである。このような王権の性格は百済滅亡後の日本との外交に反映し、佐平をもつ耽羅の王および使者の王子などにも天皇は同格の大乙上の冠位を与えた。また、耽羅の主要豪族である高・良（のち梁）・夫氏はいずれも新羅・高麗から星主・王子・都内などの称号を付与されている点にも注目し、「済州島内の地域的な統合が高麗時代に至ってもいまだ確立していな」とも評価した。

森・寛とも、百済・新羅・高麗に従属した点を重視し、とくに寛は権力構造が階層的に秩序化されていなかったことも含め、耽羅が王朝として未成熟な段階であったことを強調している。

奥村周司は高麗の外交儀礼、とくに周辺諸国の使節なども参席する八関会儀礼などを素材とし、高麗の国家意識について検討した（1979年、1982年）。そのなかで、「宋商」「女真」「日本」などととも「耽羅」が外国の使節として参加していたと指摘している。先の限界があったにせよ、高麗も耽羅郡設置まではこの地を外国とみなしていたのである。

3 耽羅鯨と日本列島との交流

森公章は「天平十年周防国正税帳」（『大日本古記録2』所収）に表われる「耽羅方脯」ということばを手掛かりに、当時の耽羅と日本の交流について検討している（1985年）。前記史料から、天平10年（738年）10月、耽羅島人が「来日」し、都に行ったことと周防国が「耽羅方脯」を耽羅島人から購入したことを確認し、これを出発点にして、関連史料も含めた検討を行なった。そして耽羅島人は外交使節ではなく、漂流民の可能性が高いこと、「耽羅方脯」は鹿、牛、猪のどれかの乾肉であろうと推論した。この推論の過程で、『延喜式』主計上式のなかから肥後国（熊本県）が「耽羅鯨」39斤、豊後国（大分県）も「耽羅鯨」18斤をそれぞれ調として貢進していたこと、また、平城京跡出土木簡から天平17年（745年）に「耽羅鯨」6斤を貢上していることなども紹介し、この「耽羅鯨」が産地を示すものではなく、鯨の種類を表わすものと結論している。

この森の検討を踏まえて、梁聖宗は「耽羅鯨」そのものに焦点をあてて検討した（1994年）。森の研究だけでなく、植民地時代に初代済州島司を勤めた今村頼（1928年）、近年の網野善彦の研究にも目を向け（1993年*）、綿密に分析している。その結果、「耽羅鯨」は種類というより産地の可能性が高いこと、そして森説では否定されていた「耽羅方脯」と「耽羅鯨」の関連を再検討し、両者は基本的に同一であると結論づけた。すなわち「耽羅鯨」は済州島の鯨を干したものである。

史料上の「耽羅」をどのように解釈するにせよ、濟州島人と日本列島の人々のとの交流を前提としなければ、このような名称が発生するわけではなく、いずれの「耽羅」に関する研究からも、古代の日本列島と耽羅の関係が、きわめて深いものであったということを結論づけることができる。

*梁聖宗は網野善彦（1993年）を引用しているが、網野は1987年にすでに「耽羅」について検討している。引用文献を参照のこと。

4 1105年以後

政治史的には、1105年の高麗の耽羅郡設置により耽羅王朝は終わりを告げる。しかしながら、それ以降もこの地域には独自の動きが確認できる。

村井章介は三別抄の乱を総括的に検討し、モンゴルの膨張という大きな歴史的変動という文脈なかでこの乱を位置づけようとした（1982年）。ここで注目したいのは、三別抄の敗北に至るまでの三別抄の根拠地の移動である。まず1270年に江華島を離れ、千隻以上の船で朝鮮半島西岸を南下し、珍島を根拠地と定めた。ついで1271年、蒙古・高麗連合軍に攻略されると濟州島に逃れた。以上の経緯は三別抄の乱が海上勢力によって支援されているということを示している。さらに最後に濟州島に逃れ、そこで受け入れられたということは、逆にこの島が高麗との一体感を強くもっていなかったことを示すものであろう。

高橋公明は、三別抄の乱が鎮圧された以後も、モンゴルによる濟州島の直轄管理とか、元の衰退後のモンゴル系の人々による反乱などによって示されるように、高麗は濟州島を十分に支配下に置くことはできなかったことを強調した（2001年）。

藤田明良は、朝鮮で編纂された明の公文書集『吏文』のなかから、海域世界の研究にとってきわめて興味深い記述を発見した（1997年）。時期はまさに元明交替期、すなわち倭寇が活発化する時期である。

1368年、朱元璋は即位して明の初代皇帝となると明軍を浙江省に派遣し、海上交通の掌握を試みる。この動きに対し、舟山列島を根拠地とする海上勢力、すなわち船を持ち海外とも交易する能力のある人々が蜂起し、200隻余りが明軍の立てこもる明州府城を攻撃した。最終的に、この蜂起は明軍によって制圧される。この蜂起の背景には、海上勢力をも管理下に置こうとする明政府の方針に、この海域で比較的自由に交易をしていた人々の強い反発があったのではないだろうか。藤田はこの蜂起を蘭秀山の乱と名づけた。史料のなかで、この勢力を「蘭秀山賊」などとしているからである。おそらく、この反乱の中心人物が舟山列島のひとつの島、蘭秀山島を根拠地としていたからだと藤田は推測し

ている。いうまでもないが、蘭秀山島の勢力だけではなく、舟山列島各地の海上勢力がこの戦いに参加していた。この反乱の鎮圧によって事件は決着したわけではない。

のちに逮捕された舟山列島の人たちは、そのあと「耽羅」に逃げて「海藻」(ワカメ)を買い集め、そこから高麗に向かう。2年後の1370年、明からの通報で高麗政府も蘭秀山の乱の参加者を捜索し、その結果、妻子とあわせ100余人が逮捕され、彼らの資産とともに明に送還されている。

ここで注目したいのは、舟山列島の海上勢力が、戦いに敗れたのち、済州島に立ち寄って、海藻を手に入れることができたり、全羅道を拠点とする浙江出身の海上勢力がいたり、さらには高伯一という済州島出身の可能性のある人物が反乱勢力に加わっていたことである。この記述から推定できることは、海を越えて人々が交易などを通じて関わりあっていることである。そして二年もの間、乱の参加者である外国人が活動できるということは、海上勢力のネットワークを公権力が掌握していなかったことも示している。倭寇という現象は、まさにこのような時期に発生しているのである。

田中健夫は倭寇の構成を検討し、民族的にも地域的にも多様であると推論した(1987年)。その検討のなかで、「倭寇活動と済州島の関係を直接実証する史料はとぼしいが、その存在は充分注目に値する」と述べるとともに、耽羅の歴史を概観し、「済州島が完全に朝鮮王朝の領域に入るのは世宗朝以後」と位置づけている。また、1277年以降、元がこの島を直轄して牧場とした史実に注目し、倭寇集団の大量の馬匹は、済州から供給されたものではないかと推定し、1482年の「成宗実録」(『朝鮮王朝実録』)の記事に済州の人々が沿海地域に自由に出入りし、倭人の言語・衣服を模倣して海賊を行なうとあることから、「済州島民は朝鮮王朝に対する帰属意識が薄かっただけでなく、倭寇そのものであった」可能性を示唆した。

高橋公明は、『朝鮮王朝実録』のなかに散見する「以船為家」に類する表現に注目し、北九州・対馬島・壱岐島からだけでなく、済州島からも、家族で移動性し、海に基礎づけられた生活をする「頭無岳」「鮑作干」と呼ばれる人々がいたことを確認し、田中健夫と同様、倭人との密接な交流を想定した(1987年3月)。

さらに高橋は、15世紀初期の朝鮮政府の辺境政策も検討した(1987年11月)。対馬島と済州島に対する姿勢が、いずれも国家秩序にとって危険な存在ということで共通していたため、きわめて類似したものであることを確認し、また済州島の独自性ゆえに、その朝鮮化が政治的な課題となり、その実現にほぼ半世紀かかったことなども明らかにした。その過程は、第一に、済州子弟の制度など伝統的勢力の懐柔、第二に、星主・王子などを名誉職的な左都知管・右都知管に任命するなど、伝統的勢力の弱体化、第三に、地方行政・税制など国家の支配制度の貫徹に整理できる。しかしそれにもかかわらず、1445年、

名誉職と思われていた左都知管・右都知管を廃止しなければならなかった。もと星主等は、都に居住して済州島から切り離されながらも、独自の方式で済州島に影響を及ぼしていたからであった。

これらを前提にし、高橋は東アジアの海域世界全体を視野に入れて検討した（1992年）。15・16世紀、済州島人の活動が海域全体に及ぶことを明らかにし、複数の国家領域にまたがって活動をする人々の相互の交流を考察し、琉球王国・対馬島・海狼島などと並んで済州島がきわめて重要なところであることを示した。

また高橋は、高得宗という15世紀前半に活躍した済州島出身の官僚の年譜を作ることによって、済州島の朝鮮化という歴史的な過程も跡づけた（1990年）。済州島出身者としてはただ一人、高得宗は同上官まで昇進し、明・日本に外交使節として派遣されるなど活躍した。また、普通の官僚と異なり、出身地の済州島政策に積極的に関わった。済州島の朝鮮化という大状況のなかで、この島の独自性をできるだけ確保しようとする姿勢を貫き、官僚でありながら、済州島、あるいは旧耽羅王族の代理人ともいえるべき存在となっていた。その一方で、済州島に対する蔑視観を背景にして、司憲府などから9回にわたって告発され、流刑にもされた。国王世宗はほとんどの状況で彼を守ろうとしたが、それは外夷を懐柔しなければならないとする世宗の華夷思想によるものであった。

以上、1105年以降を対象にした研究は、第一に、海を通じて周辺地域と深く結び付いていたこと、第二に、朝鮮半島の政治秩序とは一定の距離を置いていたことを示している。王朝としての耽羅が消滅してからも済州島の独自性は強く維持されていたのである。

5 今後の耽羅研究

耽羅が消滅した1105年以降の研究をやや詳しく紹介してきたのは、2で紹介した耽羅についての研究に対してひとつの不満があったからである。ひとことで言えば、自立性、あるいは独自性に対する低い評価ということである。

森・寛のいずれも、朝鮮半島の王朝に従属的な点を強調し、それらに依存することでしか王権を保持しえなかったと評価している。しかし一方で、661年（斉明6年）から693年（持統7年）にかけて、9回にわたって耽羅は遣日本使を派遣し、日本からも2回にわたって遣耽羅使が派遣されている。百済の滅亡という重大な事態に対して耽羅がとった主体的な外交と言えよう。このことは、百済などから官位を授与された時期にも同様な能力があったことを示しており、結果的には他国に服属という形式を選択するにせよ、王朝という形態が存在している以上、そこに独自の政権があったと想定すべきでないだろうか。

この点で参考になるのが琉球の王朝である。王族は他の貴族層から突出した存在ではな

く、かつ複数いたため、15世紀始め頃まで明は山南王・中山王・山北王の三人の王を冊封し、かつ貴族層にも官位を授けている。この状況も、見方を変えれば琉球が明に従属していると評価できるかもしれない。しかしながら、琉球の側に独自の政権があったことは疑いなく、その従属的な形式を選択したのも琉球側の独自の外交であった。近年では、薩摩に征服された1609年（慶長14年）以降ですら、琉球側の独自性を評価する研究が主流となっている。

また、15世紀以前の濟州島の歴史を海域史の立場から検討するとき、誰もが直面するのが、史料の限界である。はじめに述べたように耽羅時代は、耽羅人による歴史記述はなく、朝鮮半島が高麗・朝鮮時代になっても、基本史料は濟州島人によるものはほとんどない。多くは『高麗史』『高麗史節要』『朝鮮王朝実録』などの、いわゆる「陸地人」によって編纂されたものが中心である。この状況のなかから豊かな成果を生み出すには多様な素材に注目する以外に方法はない。

藤田明良はこの方法を積極的に取り入れ、「陸地人」の史料をさらに広い視野から再検討するだけでなく、後世編纂された地誌類、古地図、伝承、考古学的な成果、地名など多くの資料を用いて、濟州島の歴史を海域史の立場から豊かにする提案をしている（2001年）。

<引用文献>

網野善彦「中世から見た古代の海民」『日本の古代8 海人の伝統』中央公論社、東京、1987年。

網野善彦・姫田忠義「海と太陽と日本人」『民映研通信』麦笛号・42号、東京、1993年。

今村鞆「濟州の鯨」『歴史民俗朝鮮漫談』南山吟社、京城、1928年。

奥村周司「高麗における八閩会的秩序と国際環境」『朝鮮史研究会論文集』16集、龍溪書舎、東京、1979年。

奥村周司「高麗の外交姿勢と国家意識」『歴史学研究』別冊特集号、東京、1982年11月。

笥敏生「耽羅王権と日本」『続日本紀研究』262号、大阪、1989年4月。

高橋公明「中世東アジア海域における海民と交流——濟州島を中心として」『名古屋大学文学部研究論集』史学33、名古屋、1987年3月。

高橋公明「朝鮮外交秩序と東アジア海域の交流」『歴史学研究』573号、東京、1987年11月。

高橋公明「濟州島出身の官僚高得宗について」『名古屋大学文学部研究論集』史学36、名

- 古屋、1990年3月。のち改稿して『済州島』4号、東京、1991年3月。
- 高橋公明「中世の海域世界と済州島」『海と列島文化4 東シナ海と西海文化』小学館、東京、1992年。
- 田中健夫「倭寇と東アジア通商圏」『日本の社会史1 列島内外の交通と国家』岩波書店、東京、1987年。のち『東アジア通商圏と国際認識』吉川弘文館、東京、1997年。
- 高橋公明「海域世界の交流と境界人」『日本の歴史14 周縁から見た中世日本』講談社、2001年。
- 藤田明良「『蘭秀山の乱』と東アジアの海域世界——一四世紀の舟山群島と高麗・日本——」『歴史学研究』698号、東京、1997年6月。
- 藤田明良・李善愛・河原典史「島嶼から見た朝鮮半島と他地域の交流」（韓国文化研究振興財団）『青丘学術論叢』19集、東京、2001年11月。藤田は第一部の「高麗・朝鮮前期の海域交流と済州島」を分担。
- 村井章介「高麗・三別抄の叛乱と蒙古襲来前夜の日本」『歴史評論』382・384号、東京、1982年2月・4月。のち『アジアのなかの中世日本』校倉書房、東京、1988年。
- 森公章「古代耽羅の歴史と日本——七世紀後半を中心として——」『朝鮮学報』118輯、天理、1986年1月。のち『古代日本の対外認識と通交』吉川弘文館、1998年。
- 森公章「耽羅方朮考——八世紀、日本と耽羅の『通交』——」『続日本紀研究』239号、大阪、1985年6月。のち『古代日本の対外認識と通交』吉川弘文館、1998年。
- 梁聖宗「日本における済州島研究の現況」『済州島』5号、東京、1992年5月。
- 梁聖宗「木簡の『耽羅鯨』についての一考察——現存する最古の記録遺物を読む——」『耽羅研究会報』11号、東京、1994年7月。